

鳥取市指定文化財調書（案）

[illegible]

【所見】

1. 文化財としての評価

調査報告書にある通り、本建造物は

- ① 当初建築部分
- ② 昭和20年以降の増築部分

を主な構成要素としている。

このうち、①は昭和2年に計画され昭和5年に完成した擬洋風建築で、昭和18年の鳥取大震災以前に建築された擬洋風建築としては中心市街地では唯一の現存例である。重要文化財仁風閣（明治40年）に次いで古く、江戸時代から現代への過渡期の城下町・鳥取の建築文化の貴重な資料となっている。

（同時期の建築として、登録有形文化財五臓圓ビル（鉄筋コンクリート建築）、登録有形文化財金田市長邸（近代和風建築）が現存している）

樗谿にあった招魂社の移転後、その土地を取得し、鳥取市公会堂の対面に建築されており、当初は医院として計画されたものである。室内に、先行建築から移築されたとされる支柱のない螺旋階段をもっており、若干改変されているものの、内・外部とも当初の姿をよく残している。

また、②は、終戦後進駐軍が将校の宿舎として使用した際に増築した部分である。外部は当初建築との整合を一応意識したもので、米軍将校の生活に合わせて建築・設備が設計されている。①部分が和小屋による擬洋風建築なのに対して、②部分はトラス構造の小屋組みとなっている。ダンスホールに使用された部屋の壁画（アメリカ人女性のダンサーの彩色画）や、英語による非常口の貼紙なども残されており、不明な点の多い占領期の進駐軍の遺構として貴重な資料であるといえる。

以上のことから、①は鳥取市の中心市街地の、城下町から近代都市への移行を知るうえで貴重な遺構であり、②は占領期の地域の状況を知るうえで重要な資料であると位置づけられる。

本文化財は、登録有形文化財（建造物）としての要件のみならず、上記の要素（建築史的・地域史的価値）がひとつの建築物として現存している点に意義があり、市指定文化財として現状の資料価値を保存する必要があると考える。

2. 保存・活用に係る評価

所有者は、当該文化財の保存を望んでおり、現在は遠隔地（大阪府）に居住しているが、借用者が代行して日常的管理を行っている。

鳥取市歴史博物館、鳥取東照宮（重要文化財樗谿神社本殿・幣拝殿並びに唐門）に隣接しており、上町地区のランドマークとなっている。以前はタウン誌の編集や文学フォーラムの事務局などとして間借りされていたこともある。

現在アトリエとして貸し出されている2室を除き、整理・清掃等を行うことで主

要部分は公開可能な状況である。

文化財指定後は、常時公開は難しいが、建造物の特別公開、また、文化財・文化イベント等での活用について取り組むことが可能と考えられる。

3. 現状と当面の課題

全体的には健全な状態だが、経年劣化が進行しつつある。

長期的な保存のためには、当面は雨漏りや軒の腐朽等、部分的な修理が必要である。また、26年度に白蟻が発生していることが確認されたため、早急に防除が必要である。

所有者にとっては大きな負担となるため、保存のためには何らかの支援が必要な状態である。

以上のことから、市指定文化財として指定し、当該文化財の適切な保護を図る必要があると考える。

(文化財専門員 佐々木孝文)